

子ども・若者の生きづらさによりさう特別支援教育の実践

武田 和義

田中 豊一

菱木 淳一

一 全体会の報告

1 特別講演①「子ども・青年の生きづらさの諸相 〜情報消費社会と格差・貧困層の時代の中で〜」

札幌学院大学 富田 充保

子ども・若者の自己肯定感・自尊感情の低さの問題に焦点をあてながら、人間関係の中にある生きづらさについて報告がなされた。

第1に、子ども・若者の生活と情報・消費社会の依存があげられた。「お菓子の新製品を持参して話題にする」「スマ

ートフォンでコミュニケーション」などのように、子ども・若者は情報・商品をアイテムにしながら不安定な人間関係をつなぎとめている。第2に、格差・序列化社会があげられた。良い子で満点の時だけに認められる条件付きの人間関係の中で子ども・若者は生きていくと指摘している。

第3に、貧困と若者の労働現場の流動化があげられた。貧困は自己の尊厳やアイデンティティー形成を困難にし、不安定雇用は日々尊厳が踏みにじられる状況にあると指摘した。第4に、子育て教育をめぐる大人の課題があげられた。子育て・教育の中の「頑張って」という言葉が「頑張っている」子どもは尊重され、それ以外は切り捨て、排除されるのだというメッセージになりかねないと指摘している。子どもは、社会の未来の希望であることを現実にするために、ありのままを受け止める自己肯定感を見直し、貧困と不安定雇用の現実が変わる社会の可能性を「対話と学習」の課題にすることが提起された。

2 特別講演②「子ども・若者の抱える困難

〜北海道での調査にみる自立の不等等〜」

札幌学院大学 大澤 真平

貧困・虐待調査から見えてきた、自立へ向けての構造的な不平等について報告がなされた。

「貧困問題の様々なデータを国際比較すると、ひとり親世帯の貧困率の高さや家族・教育政策への財政支出の乏しさが浮き彫りになってきた。日本の貧困は、社会の構造の中から生み出されたものだ」と指摘している。

こども虐待調査からは、虐待が生活基盤の脆弱性にあることが明らかになってきた。虐待が原因で子どもは「いじめ」や「不登校」など様々な問題に直面しており、社会的自立を一層困難にしている。虐待調査の示すこととして「当たり前の生活を送る上での条件の欠如」「家族に頼れない子どもの選択肢の乏しさ」「子どもの育ちを家族任せにすることの結果」を指摘している。子どもの自立を考える前提に、社会的な仕組みの構築と家族のために必要な支援は何が考える必要があると提起した。

二 分散会の報告

1 分散会①

武田 和義

4本のレポート。13名の出席者であった。

遠藤さんは、小学校での特別支援学級のS君と、算数の時間に通級するAさんの学習について報告した。1学期に

学習した、分数、少数、面積・体積、長さ・長さ・時間などの学習内容を、2学期には、2人の子どもの生活に生かすことや、数を実感する授業づくりをめざして工夫してきたことを、題材的に紹介した。「安いのはどれ？」として、スーパーのチラシを活用しての値段調べや、一あたりの量の学習など多様に興味関心を大切に取っていくことで、子どもたちが楽しく算数の学習に取り組めるようになっていく。学校では、「学力」は、通常教育との比較になり、障害児教育でも「できる・できない」の評価に陥ってしまうことになるので、実践を進める上では、子どもに自信をもたせることが大切であるという共同研究者からのアドバイスがあった。

千葉さんは、担任する4人の子どもの毎日の発見の連続から感ずる教育観、障害観、子ども観などを報告された。対人関係での不安があり、吐き気がひどくなるAさん。みんなについていられているから、実は大丈夫ではなく。不安の感じ方は、その子の感覚であることにおもいを馳せることで、好き嫌いへの指導を見直すことができたこと。宿題や家庭学習に取り組めないBさんへの、気持ちに寄り添った関わりなどが報告された。又、交流学級の担任の先生とおもいを交流することで、個々の子どもへの支援と、どの子ども居心地がよいあたたかいクラス作りをめざす両輪

の取り組みに至っていると結ばれた。

永武さんは、養護学校高等部で「自分らしく、今を生きる」ことをどう支援していくかという実践事例について報告された。「日課に沿って行動できない・わがまま・頑固等々」の、いわゆる問題だらけYさんの行動をどう受け止めていったのかということと、生活面や学習面での変化が紹介された。青年期の子どもたちへ大切にしてきたこととして、6点にまとめられている。①気持ちをつまらなくても伝えること+伝えられること。②自分自身の揺れや葛藤を見つめる。③こだわりに向き合う+こだわらない。④「時間にそって」を再考する。⑤「豊かさ」を考えるとということである。

野崎さんは、永武さんと同じく高等部での実践事例を通して、学んだレポート報告をされた。学部研修のキーワード「今の充実が将来の充実」が理想ではあるけど、なかなか信じきれない始まりであったこと、毎日が「バツ」サインのSちゃんとの出会いと、様々な場面でのかかわりとエピソードを紹介した。「水かぶり事件」「ベースボール大会」「進級時の引継ぎ」「現場実習」等の取り組みなどを通して見えてきたこととして、①実践の出発点は、生徒の気持ちであること。②たつぷりかかわり、そばに居ること。「一人」と「独り」を間違わない。③生徒は、意外と強い、信じること。であると3点にまとめて報告した。

2 分散会②

田中 豊一

分散会②では、5本のレポートの発表があった。全体を通して「自己肯定感」がキーワードになり、自分に自信がもてない、自分を見つめられない、自分の明日に自信がもてない児童生徒たちへの取り組みが報告された。前日の講演とつながって考えられるレポートばかりであった。

夕張高等養護学校、玉島さんからは、「いじめられる子どもを作らないためには、いじめられる子どもを作らない」の考え方の基、「自己肯定感を大切にしながら、社会性や対人関係の力を育てる」というテーマで3年計画の研究を行った報告がされた。教師も成果・評価をもとめられる状況から、余裕なさ、焦りにより生徒の変化が見えやすい強い指導へつながってはいるか、また「強い指導は短期的な抑止効果は期待できるが、だめなものはどうして、ためなのか」という意味を伝え、考えさせることができなければ、生徒は怒られるから、注意されるから行動の規範になり自分で判断できなくなる」と指摘している。安心した環境で成長を支援してくれる人がいてこそ成長が保証される。生

徒自身が考え成長していくためには、教えるというティーチだけでなく、良さや意欲を引き出すコーチとのバランスが必要である。生徒の自己肯定と、その生徒たちを取り巻く保護者や教師の自己肯定感とは車輪の両輪である、とまとめられた。

白糠養護学校、田中さんからは体育や給食指導について児童の指導の経過を学年教員と共通理解しながら、指導内容の改善に取り組まれたことについて報告された。はじめに、個別の教育支援計画、個別の指導計画を行動目標、数値目標の設定、評価が求められ、それが本人のニーズ、生活に結びついているのかを指摘された。今回の発表では、体育や給食指導の事例の中で目標そのものの評価ではなく、指導の手立て、経過について教師集団で共通理解を図り検討しながらの取り組みが発表された。両方とも、児童の内面を育てるために観点を共有できるか、教師間でどこまで共通理解を図るかがポイントとなり、授業の打ち合わせの時間が足りない場合は、文書で知らせる、隙間の時間の会話を大事に取り組まれていた。

北見支援学校、能代さんからは、昨年勤められていた特別支援学級において支援員として1年間関わってきた実践報告と、支援員の困難さが話された。支援員制度が二〇〇七年から始まり5年が経過しようというところだが、いま

だ各自自治体や学校によって対応の差がある。このレポートはある地方での支援員の状況（なり手の少なさ）や校内での役割に関して支援員の立場から問題提起され、教員として貴重な意見を聞くことができた。また、1年間関わった学級の児童たちとの実践では、特に支援学級か普通学級かのグレーゾーンで学習している取り組み、狭間の生徒たちの困難さが報告された。養護学校か特別支援学級か、単置高等養護学校か併設高等部かと、他の狭間の中で悩んでいる児童生徒、保護者、教師の苦悩と現実と共通しており、問題の深さを再認識した。

上ノ国町立河北小学校の安里さんからはADHDであるY君としっかりと向き合い、日々の関わりや校外学習や校内キャンプといった行事を通して、彼が成長していった事例を分析的にまとめた報告があった。自閉症児の指導でよく用いられるシールも単に応用行動分析におけるトークンとしての意味合いではなく、「自己を見つめ直すための道具」と位置づけて、その有効性を示した。

雨竜高等養護学校の関屋さんからは高等養護学校卒業生のAさんが自立への希望と支援の狭間で「自我」を確立しつつも思うようにならないまま社会的に不適応を起し、「障害者をやめたい」という悲痛な訴えをしている事例の報告であった。安易に「キャリア教育」という言葉が広が

る中、青年期における人間的要求や自我の確立を迎えた生徒たちに高等養護学校で何をはくくみ、卒業、どこにどのようにつなぐのかを考えさせられる重要な報告であった。

3 分散会③

菱木 淳一

分散会③では、小学校の通級指導教室や特別支援学校など6本のレポートが出された。

中標津東小学校の村上さんは、通級指導教室での実践を通して、すべての子どもの豊かな育ちを保障するために、通級級のダウンサイジングをすると共に、すべての学校に通級指導教室の開設することを訴えた。

新篠津高等養護学校の小野島さんは、進路指導の実践を通して見えてきた、教育で何をすべきかについて報告した。進路指導をする中で、つながりから生まれた「保護者学習会」や「バスケットボール大会」「卒業生親の会」などの様々な実践を報告した。それらの実践から見えてきた必要な考え方として、社会の現状を学ぶ場、一緒に学ぶ場、地域の住民と考えるいく場の必要性を訴えた。討論では、自己決定力を育むこと、希望を出させること、その上で、様々な社会の現実と折り合いをつけるように子どもを支えていくべきではないかという意見が出された。

札幌養護学校の下田さんは、高等部1年生のMさんとの関わりを通して学んだことを報告。Mさんの実態をできないところから見るとはならず、「Mさんのすごいところ」と題して、できることから見ていこうという試みが発表された。下田さんは、この実践から今後も取り組んでいきたいこととして3点をあげていた。「人と人との関わりを大切に、その中で活動に広がりを持たせること」「本人の気持ちを大切にしながら、人との関わりに心地よさを感じられるようにすること」「色々な経験を増やし、子どもの可能性を引き出すこと」である。

全体の討議では、地域で生き活きと暮らしていくためには、幼児期から、誰かに支えられながら、自己選択していく経験が必要で、支援者が、本人たちの支えとなるよう、もう一度発達について、よく学び、発達の芽を見抜ける存在であるべきことを確認することができた。